歴史遺産活用

『播磨国風土記』を書にする展の開催
―新しい博学連携企画―

坂江　渉

はじめに

令和二七年（二〇一五）、ひょうご歴史研究室が県立歴史博物館に開設されて以来、『播磨国風土記』（以下、『風土記』と略す場合がある）を共同研究し、その成果を県民向けに情報発信してきた。展示会、講演会やパネルディスカッションの開催、デジタルミュージアムの配信、成果本の刊行などがそれである。そのなかで筆者は、つねづね『風土記』の魅力をもっと具体的に感じられる企画を通じて、高校生や大学生などの若い世代を惹きつけ、さらに将来に亘って博物館に脚を運んでもらうきっかけを作れないかと考えていた。

考古学系の博物館では、小学生などを対象とした「土器作り」や「勾玉作り」などの体験学習型のワークショップがおこなわれている。それがその後の博物館への来館や、敷居の高さの解消に役だっていると聞く。また非常勤先の大学の博物館学の受講生たちも、そういう経験が、博物館への興味・関心につながったという話をしていた。

歴史系の博物館では単純な「モノ」作り型のワークショップの開催は難しい。しかし「文字資料」というモノに焦点をしぼり、その意味を知ったうえで高校生に競書してもらい、しかもその作品を館内で展示する企画はできないかと考えるようになった。それが今回の『播磨国風土記』を書にする展の開催である。小稿ではこの展示会の開催の

契機、いきさつ、成果と手応え、および今後の課題などについて述べたいと思う。

一、魚住和晃氏を監修者に

コロナ禍の最中の令和三年（二〇二一）頃から、藪田貫室長とともに、『播磨国風土記』の文字資料を素材にした、高校生による競書作品展の企画化について、時折話し合う機会があった。大阪府立狭山池博物館では、狭山池の歴史をイメージできる「行基」「重源」「池守」などの文字を課題とする（小学生向き）「書き初め」展が開かれていることなどを知っていたからである（博物館開館二〇周年記念行事など）。筆者は当初これに倣い、「餝磨郡（しかま）」「日女道丘（ひめじ）」「英賀里（あが）」など、現存する『風土記』の地名のみを高校生が競書する姿をイメージしていた。

しかしその年の夏、神戸大学の勤務時代にお世話になった、書家でありかつ同大名誉教授の魚住和晃氏がたまたま別件で来館された。その時この話を持ち出すと、氏は「それは興味深い企画だ。

▲館内ロビーでの作品の展示（左の２つは魚住氏の書）

高校生には少しつらい作業になるが、地名だけでなく、地名起源説話も書にしてもらい、しかも意味も理解してもらう事が重要だ」といわれた。さらに「題材とする地名起源説話の選び方と、臨書か創作にするかは生徒たちによる自由選択とし、より多くの高校生参加による競書企画とすること」などを強調され、また「監修と審査については私が担当しても良い」と仰った。これを聞いた時、正直驚いたのを想い出すが、しかし魚住氏の提言を直接のきっかけとして、この流れに沿った企画が動きだすことになった。

館内の事業企画課に企画案を示した後、まず鈴木敬二館長補佐兼事業企画課長と前田和彦指導主事とともに、近くにある県立姫路東高校を訪れた。同校とはギター・マンドリンクラブによるロビーコンサートの開催など、長年連携関係を保っていたからである。その時点で同高書道部員は一一名在籍し、主旨を説明すると、顧問教師の同意のもと、協力していただけることになった。

ただし姫路市内の他校の書道部員の在籍事情はかなり厳しく、複数校をまたいだ企画は事実上不可能だと分かり、結局今回は同校書道部内部での競書展とすることとなった。魚住氏にもこの旨を伝え、了解を得ることができた。

これを経て、令和四年（二〇二二）の一二月以降、素材となる『播磨国風土記』の地名起源説話の内容と、テキストである三条西家本の書体や字体に関する説明をするため（当館はレプリカを所蔵）、二度に亘る出前講義を実施した。

二、出前講義の実施

一回目の出前講義では監修者の魚住氏も登壇され、書というものには「臨書」と「創作」という二つのやり方があり、どちらを選ぶにせよ、記されている内容を理解しながら書くことがもっとも大切である点などを強調された。多くの生徒たちは、たとえば「王羲之流」「顔眞卿流」あるいは「我流」などの創作書があることを知らなかった。結局それまでのやり方にしたがい、全員が三条西家のテキストをそのまま書写する臨書スタイルを選択した。

▲出前講義で講演する魚住和晃氏（2022年12月）

三条西家本を唯一の祖本（おやほん）とする『播磨国風土記』は、正式の報告書ではなく草稿本とみなす見解がある。それほど誤字・脱字・衍字（えんじ）が多い資料である。生徒全員が臨書スタイルを選んだ以上、写真版の資料コピーを提示しつつ、これらの点を丹念に説明する必要が出てきた。とくに現在の常用漢字の「処」「形」「鹿」などの字が、資料では異体字で書かれている点、また不慣れな漢文を読み解く際の、返り点や句読点の取り方、そして全体として語呂合わせとダジャレに満ちた地名起源説話の中身について、主に餝磨郡の箇所にしぼって説明を加えた。

生徒たちが作品対象に選び出した地名起源説話は、印南郡の南毗都麻（なびつま）条が一名のほか、やはり地元の餝磨郡のそれに集中した。「日女道丘の神」の名がみえる枚野（ひらの）里筥丘（はこおか）条が三名、冒頭の餝磨郡条が二名、枚野里新羅訓村条・伊和里手苅丘条・少川（おがわ）里豊国村条・同里射眼前（いめさき）条が各一名となった。

いずれの場合も、日女道＝姫路の地名や、新羅（しら）訓（くに）＝白国、英賀＝英賀保、手苅丘＝手柄山など、馴染みのある地名の起源説話ばかりになった。な

かには「私は韓国のことが好きなので、「韓人（からひと）」の話が登場する手苅丘条を選んだ」という理由の女子生徒もいた。

その後、作品提出の最終締め切り日を令和五年三月上旬に設定した。ただし魚住氏の要望にもとづき、事前に作品の中間提出を求めた。それをみると説話内容の不適切な区切り方、少なくない誤字・脱字が含まれていた。魚住氏は一点ごとに丁寧な添削を加えられ、また筆者自身も説話内容の最終確認の講義をおこなった。これらの作業をしたことが展示会の成功につながることになったと思う。

これを経て、業者による軸装を全作品に施して、審査のうえ開館四〇周年記念のリニューアルオープン企画の一環として、四月から五月を会期とするロビー展示会を催した。会期中は本人や友人のほか、保護者や親戚が観覧に来るなど盛会になり、また五月七日には全員出席のもと講評会をもった。魚住氏は「どれもオリジナリティーがあり素晴らしい作品になった。『播磨国風土記』の知名度を高めてくれるはず」と評した。

三、生徒たちの感想

講評会などにおいて、生徒たちから挙がった感想は、以下のようなものであった。

○「『播磨国風土記』について詳しく知ることが出来て、興味をもった。漢字のなかの異体字の存在を初めて知って、とても面白かった」。

○「『風土記』のなかに、自分の住んでいる土地の由来話があって、すごく興味深かった」。

○「『風土記』のことは歴史の授業で習っていた。しかし実際の地名起源説話のなかには「言葉遊び」の要素がたくさん含まれており、こんなに面白い話があるのだと思った」。

○「魚住先生から、書こうとする文字に気持ちが入ってないと意味がないと聞き、今までの作品提出時には、ただ字のきれいさばかりに気をつけていたと感じた。だから今回の作品は、しっかりと文の意味を理解して心を込めて書いた」。

○「姫路市内の英賀保（あがほ）駅近くに住んでるいるので英賀里の地名起源説話を選んだ。一三〇〇年前から「英賀」の地名があったことに驚いた。地元の

歴史への関心が出てきたので、調べたら戦国時代に「英賀」の地で、大規模な戦さがあったことを知った」。

○「姫路市の白国に住んでいるので、『風土記』の新羅訓（しらくに）村の話を臨書した。調べると地元の白国神社の神様の名前が、自分の苗字とも関わっていると分かり、親近感が沸いて写すことができた」。

○「今まで八文字以上の作品を写したことは無かったので、四一字への挑戦はたいへんだったが、出来た後は達成感を得られた」。

これをみると分かるように、地名起源説話の意味を理解したうえで書にすることが、地元への愛着や親しみにつながる、というこちら側の意図が、生徒にもかなり伝わったという感じられる。とくに出前講義を受けた後、さらに地元地名について調べ上げたという生徒が二名もいたことは収穫だった。

『播磨国風土記』の地名起源説話の数は、明石・赤穂両郡を除いても、トータル三六〇例以上に及ぶから、同様の企画を各地で開催できる可能性がある。『風土記』の文字資料というモノを使った競書展は、歴史系の博物館に相応しい、新しい博学連携企画の一つに位置づけられるであろう。

おわりに

『播磨国風土記』を書にする展のあり方を振り返ってみると、一つに、書の専門家の魚住氏の協力を得られたこと、もう一つは、館内の指導主事の前田和彦氏が、連携先の姫路東高校との間で、粘り強い交渉とやりとりをしてくれたことが、大きな成功につながったと感じられる。今後も同様の競書展を播磨各地で催したいと考える。

その際、課題となるのは、受け皿となる高校をどのように探していくかの点、また恒常的な開催経費の確立、とくに作品の軸装代などをどのようにまかなうかの点がある。これらの点も考慮しつつ、新しい博学連携企画をさらに広げていきたいと思う。